

兵庫が育む こころ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

6 月号
2018 No.808

特集

自立して未来に挑戦する
態度を育む兵庫型「体験教育」



異学年交流で、みんな仲良し！

～小野市立大部小学校～



月刊「兵庫教育」
URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集 自立して未来に挑戦する態度を育む兵庫型「体験教育」

学校訪問

元気いっぱい 力を合わせる大部っ子

小野市立大部小学校

管理職による随想

「和顔愛語」で「〇〇やかな生き方」を

前朝来市立竹田小学校長

すずき ふみたか
鈴木 文孝

1

論文

自然体験教育の体系化と自然学校における自然体験教育

県立南但馬自然学校長

はっとり たもつ
服部 保

4

教育実践

環境体験学習でキャリア形成を図る
～育てたい力を見据えた学習計画の作成～

三田市立藍小学校 主幹教諭

たけうち けんすけ
武内 健介

8

「トライやる・ウィーク」を活かし地域に根ざした「キャリア教育」の推進

福崎町立福崎西中学校 教諭

おかもと けんじ
岡本 健司

12

～人みな使命あり～ 村高発 地域元気化プロジェクト

県立村岡高等学校 主幹教諭

みやけみ なこ
三宅美奈子

16

「自殺予防に生かせる教育プログラム」の活用（第5回）

学校からの実践報告②

県立教育研修所 心の教育総合センター 24

授業づくり

文章題が「わかる」ということ
～演算の構造に着目して～

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授

おかべ やすゆき
岡部 恭幸

26

グローバル化する社会への対応（第37回）

21世紀のライフデザインとグローバル・コンピテンシー

関西学院大学 学長直属SGU 招聘客員教授

くき た じゅん
久木田 純

28

6 月 号
イラスト

南あわじ市立西淡中学校
教諭 花房 克尚



授業実践

「自分らしく働く」を目指したデュアルシステム
～障害のある生徒の就労実現を目指して～

県立西神戸高等特別支援学校 主幹教諭

もりかわ

森川

あきら

晃

32

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第61回）

通常の学級における特別なニーズのある生徒を包容する人的環境づくりの効果
―クラスワイドな支援と個別支援がかみ合う取組―

赤穂市立赤穂東中学校 教諭

はら

原

ちづこ

智津子

35

県の施設紹介

やきもの専門の美術館の取組

兵庫陶芸美術館 36

幅広い世代が交流し楽しめる「新しい学び場」

県立歴史博物館 38

コラム「教育の接点」

仕事場

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問

はやし

林

よしき

芳樹

40

編集後記

トピックス P20～23

〔但馬〕養父市立大屋小学校

地域とともに 22

〔播磨東〕小野市立小野東小学校

チーム東丸、大海原に乗り出す 21

〔播磨西〕神河町立寺前幼稚園

小学生との交流を大切に！ 22

〔県立〕県立西脇工業高等学校

金ゴマプロジェクト 20

〔丹波〕篠山市立かやのみ幼稚園

自然いっぱい！生き生き体験！ 23

〔神戸〕神戸市立たまつ幼稚園

人と関わる力を育てる 20

〔阪神〕猪名川町立つつじが丘小学校

体幹アップで心と体づくり 21

〔淡路〕洲本市立洲浜中学校

私たちの町、すもとの再発見 23

〈編集企画〉 神戸 成企 里 知純 高見 秀樹 田中 大介
中野 純也 村中 利章 県立教育研修所(義務教育研修課, 高校教育研修課)

特小学校集 No.1

環境体験学習で キャリア形成を図る ～育てたい力を見据えた 学習計画の作成～



三田市立藍小学校
主幹教諭 武内 健介

1 はじめに

私が勤務する藍^{あい}小学校は、児童数約100名の小規模校で、周辺はのどかな田園風景が広がり、貴重な生物が生息する自然豊かな地域である。

藍小学校では、3年生環境体験事業で例年「サンキュウの園」に行かせていただいている。サンキュウの園^{その}は、三田自然教室を主宰されている谷口誠司^{たにぐちせいじ}さんが設立された、自然環境体験施設である。今回、サンキュウの園での体験活動をもとにした、児童のキャリア形成を目指す総合的な学習「藍のたからもの」の取組を紹介する。



▲ サンキュウの園 入口

2 体験活動とキャリア教育

体験活動とは、どういう活動であるべきなのだろうか。兵庫県教育委員会は、体験活動を『子どもたちの「自立」に向け、体験活動における試行錯誤の中で、自己認識や自尊心

情を高め、学ぶ意欲や成長する意欲を喚起する。また、人間としての在り方や生き方を考え、社会の一員としての自覚を深めさせる（平成30年度指導の重点）』としている。さらに、『体験活動での学びをその後の生活や学習にいかす指導の工夫を行うこと（平成23年3月4日豊かな人間性と社会性を育む兵庫型「体験教育」の充実に向けて（報告）』とも記している。以下にその手順を示す。

学習計画の作成 体験活動の実施 事後指導

「組み立てる」	「仕組み、見守る」	「振り返って意味を考える」
体験活動を核とした様々な学習活動を相互に関連付け、学校教育活動全体を「組み立てる」。	子どもたちの主体性と協同性を尊重した活動を「仕組み」、解決に導く役割を果たしつつ子どもたちの育ちを「見守る」。	子どもたち一人一人が自身の活動を「振り返って」言語活動により体験から学んだことの「意味を考える」指導を行う。

▲ 体験活動での学びを生かすために

体験が目的ではなく、体験を通して生きる力をつけることが最終的な目的であるという意識を教師自身が強く持つことが大切である。

また、体験活動におけるキャリア教育の視点も重要であると考えている。キャリア形成を図る体験活動について、兵庫県教育委員会は『④多様な体験活動の実施 保護者や地域の人々、関係機関等と連携しながら、自然体験、社会体験、就業体験、ものづくり体験等、多様な体験活動や地域を支える産業に目を向ける機会を設け、人や社会と自分とのかかわりを認識させる。また、体験活動の学びを生活

や学習にいかすため、事前・事後の指導の充実を図る（平成30年度指導の重点）』としている。今回の取組の中で、特に自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力を高めるための事前事後指導は、体験活動の値打ちを上げる重要なポイントであると考えた。そこで、事前事後指導にキャリアノートを活用し、キャリア形成を図ることにした。

3 総合的な学習『藍のたからもの』の取組

(1) 組み立てる（学習計画の作成）

①「ふるさと」「人」との出会い

地域教材を使った総合的な学習を展開したいという思いから、まず地域を歩くことから始めた。地域には、武庫川、虚空蔵山、藍本の里山など、魅力的な場所が多く、体験活動をするには事欠かない。そんな中、今回はキャリア教育の視点から、自然と人との関わりに注目して題材探索を進めた。

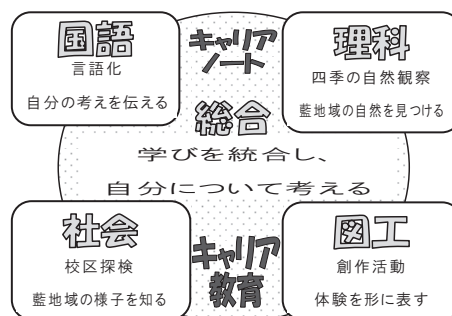
サンキュウの園の谷口さんとの出会いは、私自身にとって衝撃的であった。大人が大人に憧れる、まさにそんな感情を抱いた。

谷口さんの活動は多岐に渡る。サンキュウ牧場では、行き場のなくなった動物を引き取り育てている。三田自然教室では、多くの地域の子どもや大人、学生を受け入れ、自然について学ぶ機会をつくっている。さらに、藍地区日出坂の武庫川護岸工事の際には、県と協力し、多自然型川づくりを実現させ、多くの希少生物を守った。ただ単に、自然を守るというより、自然と人が共生できるポイントを一生かけて探っている気がした。

サンキュウの園に通い、今までの実践や人柄を知れば知るほど、谷口さん自身とその取組を教材化し、子どもたちと学習したいと強く思うようになった。ふるさとを学ぶのではなく「ふるさとで学ぶ」、人を学ぶのではなく「人^で学ぶ」を意識し、『谷口誠司さん』を中心とした1年間の学習計画を組み立てた。

②体験学習を軸にキャリア形成を図る

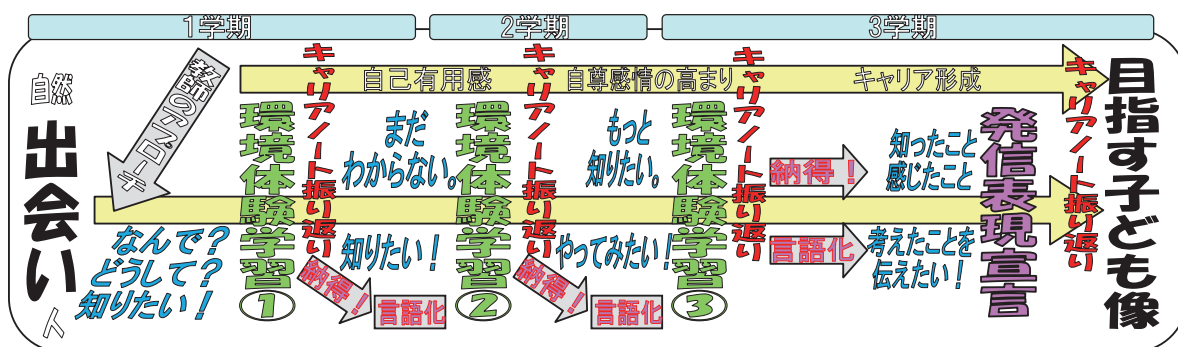
兵庫型「環境体験学習」として、年3回のサンキュウの園での活動を軸とし、総合・国語・社会・理科・図工を教科横断的に取り入れ、キャリア教育の視点をふまえ案を立てた。



▲教科横断的な取組のイメージ図

藍の自然や人との出会いをきっかけとし、藍の自然を守る活動（日出坂洗堰多自然型川づくり・ホテル保護活動・三田自然教室など）に触れさせたいと考えた。そして、谷口さんと接する中で、願いを持ち行動することの大切さに気付かせ、自分を見直す機会を設け、3学期には学びを発信させる計画を立てた。

事前事後指導には、兵庫県小学校版キャリアノートモデルを取組に合うように作り替え



▲ 1年間の活動の見通し

使用した。評価項目には、キャリア教育を通して育てたい基礎的・汎用的能力4項目を網羅するように設定した。自由記述欄には、その活動で見取りたいことを設定し書かせた。

藍中学校区キャリアノート

□□年□□組□□番□□名前

3年生 藍のたからもの サンキウ牧場ふりかえり

書いた日 2016 (平成28) 年□□月□□日 (□□□)

★体験(たいけん)学習をふりかえって、これからの自分について考えましょう。

自分の気持ちに一番近いものに○をつけましょう。	よくできた	できた	できた	できた
自) 進んで藍のたからものさがしに取り組み、自然について学ぶことができましたか。				
課) 何のためにサンキウ牧場に来たのかを考えながら活動することができましたか。				
人) 谷口先生や村上先生、奥さん先生のお話を真剣に聞くことができましたか。				
人) 友だちと協力して、サンキウ牧場での活動することができましたか。				
社) 自然に対するマナー(動物の動き、音、土を踏み踏む、生き物をさわぐなど)を守ることができましたか。				
キャ) 自分にあたえられた仕事は、さい後までやり通すことができましたか。				
キャ) 2学期のサンキウ牧場で学んだことを、これからの自分に生かしていこうと思いましたが。				

★サンキウ牧場での体験で、あなたの心を動かした一番の出来事をくわしく教えてください。そして、その体験を生かして、これからどんな自分になりたいと感じましたか？

★おうちの人から□□□□□□□□□□□□□□★先生から

自分の夢やライフプランを描こう

▲ 藍小学校版環境体験学習キャリアノート

(2) 仕組み、見守る(体験活動の実施)

① 児童にとっての必然性を仕組む

児童にとって、体験活動は楽しいものであるが、そこには必然性が必要である。私は活動の動機づけのために、藍地区の航空写真を使用した(三田市HP都市計画地図情報より)。三田市内の山々の緑や武庫川の様子が、年を追うごとに変化していることが手に取るようにわかる。児童には、「このままではいけない。」という危機感と「本当に自然は壊されているのか？」という疑問が生まれた。疑問を解決すべく、サンキウの園と日出坂洗堰へ体験活動に出発することになった。その活動には児童にとって必然性があった。



▲ 武庫川日出坂洗堰護岸工事の様子(平成17年)

② 体験活動の実際

年間3回の体験活動を実施した。

第1回目の日出坂洗堰での水生生物観察及び護岸工事の様子の観察では、多くの貴重な水生生物を捕獲することができた。生き物の捕まえ方や見分け方などは、谷口さんの指導を受けた。護岸工事が行われた後にも関わらず、生き物の種類の豊富さに、子どもたちは驚きを隠せないようであった。

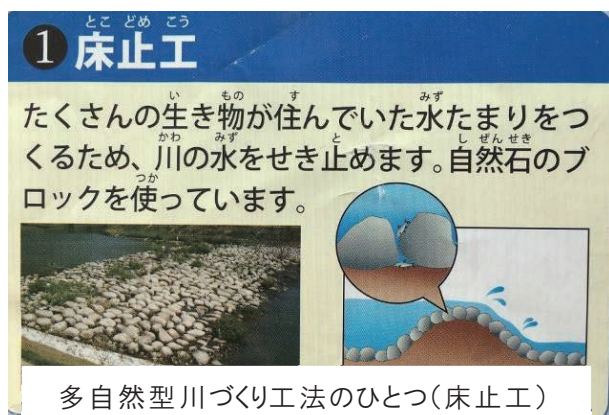


▲ 日出坂洗堰での環境体験活動

しかし、人と自然の調和を目指しつくられた、多自然型川づくり工法の説明を受けると納得したようであった。この工法を提案し、実現されるまで粘り強く活動を続けられた谷口さんへの尊敬の念も高まった。

2回目3回目の活動は、主にサンキウの園周辺で行った。自然との共生のために手が入れている園には、多くの植物や動物がいる。武庫川には蜚の幼虫のえさとなるカワニナがたくさん生息していた。これも谷口さんの活動の成果である。子どもたちは、ふるさ

と藍のあるべき姿を心と体で体験し、そして、改めて「願いを実現するために行動することの大切さ」を感じることができた。



▲ 多自然型川づくりへの経緯リーフレットより
(日出坂せきもりの会 阪神北県民局宝塚土木事務所)

③劇「藍のたからもの」に込めた思い

体験活動後のアウトプットは、児童の思いを中心に決定した。

1学期には、兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所三田業務所と連携し、教室前廊下を日出坂洗堰に見立てた、模擬水族館を作り上げた。武庫川の詳細なデータや工事の様子のパネル写真などの提供を受け、全校生や保護者に向け、値打ちのある発信ができた。

子どもたちは、3学期の最終の発信方法を「谷口さんを中心とした劇」と決めていた。活動に対する必然性と、十分な体験活動があれば、子ども達は自分たちで動き出す。劇化は、児童の熱い思いから生まれた。

2学期には、体験活動と並行して、脚本づくりに取り組んだ。自分たちが感じたことを正確に表せるよう、取材活動も入念に行った。

3学期には、全校生・保護者・谷口さんを招いて劇を披露した。劇の最後に、それぞれが3年生なりの決意を宣言することができた。谷口さんからの学びを通して、将来の自分像を考えることができたと感じた。劇後の子どもたちは、1年間の活動を終え、さわやかで晴れやかな顔をしていたのが印象的だった。



▲ 劇「藍のたからもの」

(3) 振り返って意味を考える（事後指導）

毎回の振り返りにキャリアノートを使うことで、定性的・定量的に評価できた。

○をつける評価項目内容を一定にしたことで、前回の○の位置と比較することができ、自分自身の成長を感じることが可能となった。そして、自由記述で次への課題が整理できた。

また、保護者メッセージ欄を設け、保護者と教師の両方で評価することで、一層児童の自尊感情を高めることができたと感じる。体験活動の価値づけをするのにも有効であった。

4 おわりに

今回の取組を通して、環境体験学習は児童の育成に大きな可能性を秘めていると改めて感じた。理由は2つある。1つ目の理由は、体験を通すことで、自ら考えたり決めたり行動したりすることが、明らかな実感を伴うということだ。この経験は、児童の自立に向けて大きな糧になるはずである。2つ目の理由は、1年間という大きなスパンで教職員が児童を育てる視点を持つことができることである。年度途中の活動は、児童のニーズに合わせて柔軟に変化させながらも、最終着陸地点である、「目指す児童像」を見据え続けることで、ぶれない活動が展開できる。

今後も、この自然豊かな藍の地で、素晴らしい体験を通した「学び」を子どもたちと共に積み重ね、自分の将来を見据えながら主体的に学ぶ児童の育成に努めていきたい。



「トライやる・ウィーク」を活かし地域に根ざした「キャリア教育」の推進



福崎町立福崎西中学校
教諭 おかもと けんじ
岡本 健司

1 はじめに

「トライやる・ウィーク」は、「生徒の自己認識や勤労観・職業観を深める」「地域の教育力の活性化につながる」等、多大な成果をあげ、生徒はもちろん、保護者、地域からも高い評価を得ている。

しかし、この取組も20年が経過し、ともすればその目的や意義が見逃されがちである。今後はこれまでの取組の成果と課題を検討し、さらに「トライやる・ウィーク」を充実させていくことが重要となる。それには「トライやる・ウィーク」の期間及び事前、事後指導の充実はもちろんのこと、生徒と地域とのつながりをより深化させていくなど、「トライやる・ウィーク」と学校の教育活動を結び付けた「キャリア教育」として捉えていくことが必要だと考えている。

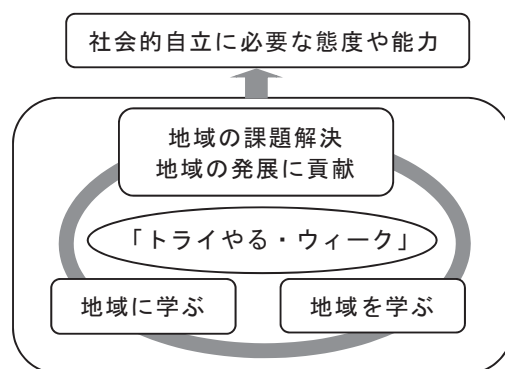
「トライやる・ウィーク」と学校の諸活動を結びつけるキーワードは「地域」である。老舗の和菓子屋さんで活動したり、和太鼓などの昔から伝わる地域の伝統芸能を学んだりする学校もあるだろう。生徒の体験先はその地域の生活環境や歴史と密接につながっており、「トライやる・ウィーク」は地域そのものを学んでいるともいえる。

地域（＝ふるさと）を学ぶことは、「キャリア教育」の基盤をつくることである。平成30年度版「指導の重点」は、「ふるさと意識」の意義を「地域への愛着や誇りがあるからこそ、地域の将来を考え、未来への期待を持つことができるものである。」と述べている。

さらに、「地域に学んだこと」「地域について学んだこと」をもとに「地域の課題を解決

し、地域の発展に貢献すること」を目指す学習活動を構想することができれば、「社会的自立に必要な態度や能力」を育てることができるはずである（図1）。

今回は、以上のような視点からとらえた福崎町及び本校の実践を紹介する。



▲ 図1 キャリア教育で生徒を育む

2 本校の現状

本校は生徒数234名、学級数は特別支援学級を含めて10学級（平成30年度）の小規模校である。学校周辺には田畑が広がり、自然豊かな環境の中で生徒は伸び伸びと学校生活を送っている。

福崎町は姫路市の北部に位置する人口約2万の町である。古くから交通の要所として栄え、近年は幹線道路に沿って大規模小売店やロードサイドショップが進出してきている。

「トライやる・ウィーク」の立ち上げ当初から地域の事業所等には積極的に協力いただいております。受入数は生徒数を上回っている状況にある。29年度は、町内2校（福崎東中学

校、福崎西中学校)の中学2年生198名に対し、225名の受入人数があった。町推進協議会、校区推進委員会の方々も意欲的に活動していただいております。「トライやる・ウィーク」はすっかり地域に根付いた取組となっている。

3 継続した取組(トライやる・アクション)

「トライやる・ウィーク」期間だけでなく、さまざまな形で受入れ先とのつながりを継続し連携を強めている。施設に入所されている方や園児、指導ボランティアの方との再会にも意義深いものがある。

(1) 福祉体験学習

例年11月に2年生が福崎町社会福祉協議会の協力を得て「車椅子」や「手話」などの「福祉体験学習」を行っている。「トライやる・ウィーク」では多くの生徒が福祉関係施設でお世話になっており、その体験を活かし、福祉体験学習のリーダーとして活動している。

(2) 保育実習

3年生では家庭科の授業の一環として例年町立の認定こども園への訪問を行っている。グループごとに「おもちゃ」を作って持参し、保育実習を体験。例年20名前後の生徒が幼児園などで「トライやる・ウィーク」を経験しており、この取組でもリーダーとして活躍している。

(3) 福祉施設訪問

夏祭りの補助、街頭募金など、「トライやる・ウィーク」でお世話になった福祉施設のイベントに積極的に参加している。また、合唱部がデイサービスセンターを慰問し、合唱やミュージカル劇を披露するといった活動も取り組んでいる。

4 地域を学ぶ～地域の財産を活用する～

福崎町教育委員会の支援を得ながら「ふるさと意識」を高揚するために次のような取組を行っている。

(1) ふるさと学習会

福崎町は民俗学者「柳田國男」の生誕地でもある。福崎町教育委員会の尽力で、例年6

月に「柳田國男・松岡家記念館」の顧問である石井正巳東京学芸大学教授に講演をいただいている。

地域の偉人「柳田國男」や地域の文化・伝統について学び、ふるさとを誇りに思う気持ちを醸成する貴重な機会となっている。昨年度で6回目、町内の小学5年生以上が参加します。以下はここ数年の講演テーマである。

平成29年度 柳田國男と故郷70年

平成28年度 柳田國男と日本昔話

平成27年度 柳田國男と妖怪

平成26年度 柳田國男と風土記

(2) 柳田國男ふるさと賞

福崎町教育委員会が地域への愛着を高めようと4年前に「柳田國男ふるさと賞」を創設した。夏休みに福崎町内の小学3年生以上の児童と中学生は民俗学調査を行う。現地調査をしたり、地域のお年寄りを訪問し取材したり、伝統行事や伝説や風習等についてレポートを作成している。

この取組で地域を歩いていると「今年も中学生がインタビューに来てくれたよ」と声をかけられることもあり、地域を知るだけでなく、地域の方とのつながりを深める面からも意義あるものとなっている。以下はここ数年の優秀作品の研究テーマの一部である。

・巡礼道～板坂の果たした役割～

・新町の小字について

・七種の滝の伝説

・駅前稲荷神社について など

(3) おじいさん、おばあさんと語る会

毎年11月に3年生を対象に地域の老人会の協力を得て「おじいさん、おばあさんと語る会」を催している。この催しは17年目を迎える。昨年度も10数名のお年寄りの方が参加してくださった。4～5名のグループに分かれ、お年寄りから戦争体験や戦中、戦後の暮らしぶりについてうかがう。なかには卒寿を超えられている方もおられ、シベリア抑留や姫路の空襲の体験を語ってくださった。「中学生に会うために長生きしたい」といって帰られる方が多い。

このことは地域の歴史を学ぶだけでなく、多くの方の努力で今日の社会や地域が成り立っていることを実感する機会となっている。

いる。戦争を直接体験された方は年々減ってきているが、地域のおじいさん、おばあさんの貴重な人生経験を聞く機会として継続していきたいと考えている（写真1）。



▲ 写真1 おじいさん、おばあさんと語る会

5 地域に貢献する～学んだことを生かす～

「総合的な学習の時間」や社会科の時間を使い、「トライやる・ウィーク」での学びや「ふるさと意識」を土台とし、「地域の課題を解決し、地域の発展に貢献する」ことを目的とした学習に取り組んでいる。以下2つの実践を紹介する。

(1) 福崎町産業振興策

①課題設定の背景

校区に福崎西部工業団地がある。約90ヘクタールの面積を誇り、35社が操業している。福崎町の経済的基盤ともなっている。「トライやる・ウィーク」にも多くの事業所が協力していただいている。そこで、「なぜ、福崎町には多くの企業が集まるのか」という課題を設定し探究学習に取り組んだ。

②企業訪問

福崎工業団地協議会の協力を得て30社に取材を行った。2～3名のグループをつくり、アポイントメントをとったうえでの訪問。会社の事業内容、福崎町に進出した理由、企業からの要望等についてインタビューを行った（写真2）。

多くの生徒は「中国自動車道と播但連絡道が交わり、交通の便がよいから」と仮説を立てていたが、実際に取材をしてみると、「豊かで良質の水がある」「大阪や神戸港から近

い」「雇用が確保しやすい」「まとまった土地が得られる」など生徒の予期しない回答もたくさん得られた。

福崎町立福崎西中の2年生約70人が7日、産業振興策をテーマにした社会科の授業の一環で、町内の工業団地などにある30社を訪問し、地元にある工場を置く理由などを学んだ。



▲ 写真2 企業訪問の様子
(平成29年2月8日 読売新聞播磨版より)

中学生 福崎の30社取材

町の魅力や進出理由

部品の製造している」と答えて、町の魅力として交通の利便性の良さを挙げた。

③発表会

身近にある工業団地であるが、取材によって初めて知ることが多かった。30社の製品は多種多様、眼薬、化粧品、紙パック、塗料など。なかには「亀のえさ」「遊園地の遊具の安全ボタン」も。

他の企業の様子も知りたいという生徒の声も多く、取材内容の発表会を催すことになった。企業の方にも見に来ていただいた。「貴社の様子をここで知りました。」と企業の方々が名刺交換をされる姿もみられ、発表会が企業間の交流の場ともなった。

④福崎町産業振興策の発表

取材のなかで産業振興上の福崎町の強みと課題が明確になった。そこで、どのようにすればさらに工業団地及び町の産業が発展するかを考え、提言として発表することとした。

「インターチェンジと工業団地のアクセスをより良くするためにスマートICを設置する」「工業団地で作られた商品を販売したり、展示したりするアンテナショップを駅に設置する」といった提言を他府県の例を元に具体的に提言した。なかには企業間の連携を密にして輸送コストを抑えることを提案した班もあった。

発表会には福崎町の産業振興課や企業の方々も参加してくださり、講評もいただくことができた。「私たちでも町の政治に参加で

きることがわかった」「福崎町に誇りをもってよりよい町づくりに貢献したい」といった生徒の感想が多かった。

(2) 福崎駅前活性化計画

①課題設定の背景

かつて福崎駅前には100軒を越える商店が立ち並んでいた。しかし、今では営業を続ける商店も少なくなり、「福崎駅前商店街」はその活気を失っている。「トライやる・ウィーク」でお世話になる大規模小売店は隣接する福崎東中学校区にすべて立地している。そこで、生徒に「福崎駅前はどうしてにぎやかさを失ってしまったのか」という課題を私が事前に設定した。

課題に対して生徒は、「車社会となり、駅を利用する人が減少した」「福崎東中校区の道路が拡充されスーパーなどが進出してきた」「福崎駅前道路が狭く駐車場もない」といった仮説を立てた。

②仮説の検証（フィールドワーク）

その後、仮説をどうすれば検証できるかを考え、班ごとに次のようなフィールドワークを行った。

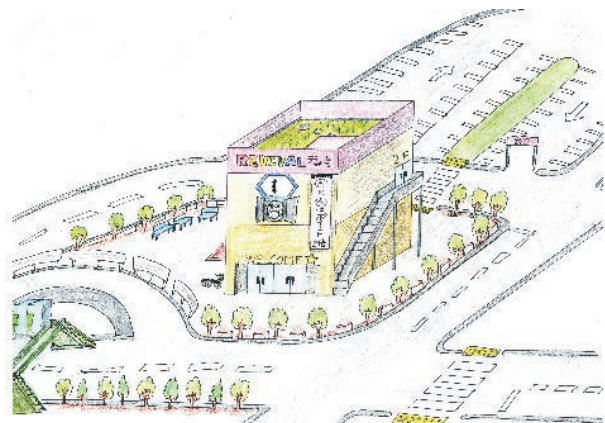
- ・駅前と東中校区の幹線道路の交通量調査
- ・駅前商店街の商店での聞き取り調査
- ・大規模小売店や駐車場の規模の調査
- ・福崎駅駅長への聞き取り調査 など

フィールドワークのなかで、「駅前のお店がなくなって買い物に不便している」というお年寄りの声が聞けたり、福崎駅の乗降者は減少したといっても1日4000人以上になるという情報を得たりした。

③福崎駅前活性化計画の発表

次に、仮説を検証するなかで得た情報や資料をもとに「福崎駅前商店街活性化計画」を考えた。「駅前への道路を拡充してアクセスを良くする」「まとまった土地を駅前に確保し中心となる小売店を誘致する」など具体的な提言をまとめた。そして、福崎町の町づくり課の方々にその内容を発表した。

どちらの発表会でも役場の方から「福崎町のことを中学生が真剣に考えてくれていることがうれしい、今後も共に福崎町のことを考えていきましょう」との呼びかけがあった。



▲ 福崎駅前構想図（生徒作品より）

6 おわりに

「トライやる・ウィーク」が目指すものは単なる「職場体験」ではなく、「社会の一員としての自覚や社会参画への意欲や態度を養う」ことであり、それが「自立して未来に挑戦する態度を育む」ことにつながる。

「トライやる・ウィークはいつまでも未完成であり続ける」という検証委員会の方の言葉が心に残っている。原点を忘れることなく、これらの取組を深め、夢や目標に向かい、具体的な計画を立て、それに向かって進んでいく力（キャリアプランニング）をはじめ、課題解決能力やコミュニケーション能力等の育成を目指すキャリア形成を支援していきたい。





～人みな使命あり～ 村高発 地域元気化プロジェクト



県立村岡高等学校
主幹教諭 三宅美奈子
みやけみなこ

1 はじめに

「人みな使命あり」、これは本校の学校指針である。本校生徒は、様々な場面においてこの文字をプリントしたポロシャツを着用して活動しており、多くの方々に「人みな使命あり＝村岡高校」と覚えていただくことで、教育活動への意欲を駆り立てている。

さて、本校は兵庫県の北部の山間部に位置し、今年度創立70周年を迎える学校である。1学年2クラス(全校生185人)と小規模だが、平成23年度に『地域創造類型』を設置し、それを平成26年度に『地域アウトドアスポーツ類型』と名称変更して、兵庫県で初めて全国からの生徒募集を開始する。新たな類型を設けたのは少子化の影響による学級減などへの打開策であり、また将来の村岡高校の在り方を検討した結果である。組織として管理職・校務運営委員・若手教員・希望者の計13名で新構想検討委員会を発足させ、「村岡高校の使命とは何か」をテーマに検討した。その中で、「地域に学び、地域と協働し、地域になくてはならない学校をつくる」という現在の学校教育目標が決定された。

それ以降、地域アウトドアスポーツ類型だけではなく、学校全体でこの目標に沿った活動に取り組んできた。香美町では「高校存続に向けた入学者増加の取組に対する支援」が香美町施策の柱の一つに挙げられ、町からも様々な協力が得られるようになった。このことはまさしく本校独自で取り組んだ長年の成果と言える。地域にとってなくてはならない

存在になれたのではないだろうか。では、本校の取組について紹介する。

2 村高発 地域元気化プロジェクト

本校では平成25年度より総合的な学習の時間を「村高発 地域元気化プロジェクト」と称し、次の三本柱による活動に取り組んでいる。

- ① 5班8グループでの活動
- ② 地元開催のマラソン大会への参加
- ③ 活動成果の発表

① 5班8グループでの活動

総合的な学習の時間は、全校生徒を学年縦割り5班8グループの編成で活動している。1時間目のオリエンテーションで代表生徒による各班の活動目的や活動内容などの説明を行い、それを理解した上で

- ア 民芸班
- イ 吹奏楽団
- ウ 食文化班
- エ 環境班
- オ 地域福祉班

の5班から1つを生徒が選択することから始まる。

そして、2時間目以後各班・グループの本格的な活動が開始される。

アの「民芸班」は、「演舞グループ」と「紙漉きグループ」の2グループに分かれて活動する。「演舞グループ」は「民謡集団蘇武」という名前で、南中ソーランの踊りと太鼓の演舞活動を行っている。学校行事だけではなく、地域の祭りや福祉の行事などにも要請さ

れ参加しているが、観客からは「元気や勇気をもらえる」と好評であり、アンコールを受けることもある。体力を消耗するが、楽しんでもらいたいという熱い思いでの踊りにより会場は、観客との一体感を漂わせている。



▲ みかた残酷マラソン「民謡集団蘇武」

ながす
長須という集落は、冬には雪で農作業が不可能となるため、室内で年中行える紙漉きが産業として盛んになった。しかし、戦後、安価な紙が出回り衰退した。そこで「紙漉きグループ」は、香美町地域おこし協力隊のほんだ
あい か
秋香氏の手によって復活された「長須の紙漉き」という方法により、射添和紙復活の役を担っている。

また、その和紙の活用方法を高校生目線で考え、提案している。例えば、生徒たちは普及に向けて日常的な活用が必要と考え、射添和紙の良さについて話し合った。

- ・薬品を使用しないので環境にやさしい
- ・中性なので劣化しにくい
- ・透光性に優れている
- ・リサイクルが容易である
- ・繊維に光が屈折して光が柔らかくなる
- ・他の自然の素材と合わせて使うと、水や火に強くなったり、破れにくくなる

これをもとに、その活用として

- ・村岡ダブルフルウルトラランニングの賞状として使用する
- ・ランチョンマットにする
- ・結婚式で円卓の中央にライトを置き、和紙と花のアレンジで装飾する
- ・子ども向け玩具人形の和服を作り、ドイツローテンブルクの店舗で扱ってもらう

など様々なアイデアや課題等を考え、商品化への可能性を模索している。

イの「吹奏楽団」は、近隣の施設や病院などへの出前コンサートや、小学校への出前レッスン活動を行っている。また特別支援学校の生徒を本校に招待し、音楽活動を通してコミュニケーションをはかり、昨年度は生徒全員分の紙タンバリンを手づくりし、一人一人に演奏にも加わってもらい、さらに盛り上がる事ができた。

ウの「食文化班」は、「食」の観点から地元食材を用いて地域活性化に関わることを目指している。まず「美方大納言小豆」など地元の食材を使ったオリジナルレシピを考案し、実際に調理、試食を行う。そして見た目・味・食べやすさなどの観点から自己評価を行い、改善案を提案する。このようにして生まれたレシピは、後で説明する活動報告の場である「村高フォーラム」で、本校生徒はもちろん地域からの参加者にも試食していただく。ここでは直接反応を得られ、生徒にとっては次回の創作意欲への励みとなっている。



▲ 商品化された「たべるびいだで。」

また、地元の和菓子屋さんとコラボレーションもした。生徒発案のゼリー「たべるびいだで。」を商品化、但馬スイーツ高校生バトルでは「審査員特別賞」を受賞し、特別審査員の方々から「柿と梨のジャムと小豆との相性が良かった」「地元の食材の使い方が素晴らしい」などの好評価を得ている。

エの「環境班」は、「棚田」と「森の健康診断」の2グループに分かれて活動している。

「棚田」は、日本の棚田百選に選ばれてい

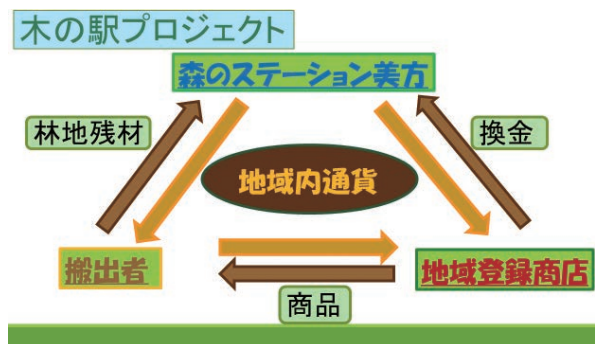
る「うへ山の棚田」の保全に携わる。この活動には、「武勇田^{ぶゆうでん}」のメンバーに手助けをしていただいている。これは、高齢化や過疎化による棚田の消滅に危機感を抱いた地元の方々が発足させたグループである。メンバーは自らの活動の傍ら、耕作放棄地の棚田の農作業にいそしんでいる。年々耕作を放棄する家から武勇田への依頼が増加している状況下で、本校生徒がお手伝いしている。生徒は全て手作業による田植えから米の収穫までを体験し、時間と労力を要した米一粒の大切さを知ることができる。生徒の中には「家は農家であるが、農作業の経験はなかった。しかし、体験してその苦労が良く分かった。来年からは祖父の手伝いをしようと思う」と感想を述べる者もいた。



▲ 田植え実習

その他にも、棚田米の販売拡大が必要だと考え、PRやプレスリリースの仕方などを学び、「武勇田」のメンバーの要望から棚田保全に必要な人手を集める方法を提言し、コマーシャルを作成したりもした。

「森の健康診断」ではその目的や方法を学び、実際に森林に入り調査を行う。植生調査では調査地の地面の状態を、込み具合調査では木の込み具合を調べ、調査地を診断している。また「木の駅プロジェクト」にも参加し、間伐の際に出る不要な木材の搬出を支援することで、地域内通貨に換金していただいている。しかし、「木の駅プロジェクト」は地域での認知度が低いので、このプロジェクトの推進を今年度の活動目標の一つにしている。



▲ 木の駅プロジェクトの概要
(生徒作成のプレゼンテーションより)

オの「地域福祉班」は、「地域福祉グループ」と「小規模集落調査グループ」に分かれる。

「地域福祉グループ」では、これまでの地域調査の結果を踏まえ、高齢者や子どもに関わる課題を見付け、解決策、企画、実践へと繋げている。4つの班に分かれ企画書を作成し、年間を通してその活動に取り組んでいる。例えば、公園の掃除、「いそうの花」(デイサービス)への訪問、射添の子ども教室などである。



兵庫県指定文化財記念物に定められている吉滝。人口わずか48人の鍛冶屋地区にある、全長28mのこの吉滝には「表見滝」という別名がある。その名の通り、表からだけでなく滝を裏から見ることができるのだ。滝の裏には社があり、厳かな雰囲気が漂っている。また、夏場にはマイナスイオンを感じられるパワースポットとして多くの人々が訪れる。吉滝までの道のりの清掃や社の管理は鍛冶屋地区の人々が行っており、まさに「小さな集落に支えられる大きな滝」と言っても良いだろう。



裏から見た吉滝



▲ 小規模集落グループ作成パンフレット

「小規模集落グループ」では、地域調査を実施し、小規模集落の魅力を発見・発信することを目的としている。集落を複数回訪問し、

散策や区長、女性の方々へのインタビューを通して高校生目線で村の魅力を探っていく。インタビューの対象者が変わると魅力も様々で、例えば区長さんは「〇〇神社」、女性目線では「子育てしやすい環境」、高校生からは「地区の祭」などの意見が出てくる。後日、歴史や文化、人口の変遷、地形、統計資料などの情報も収集し、全ての情報をインデックスに書き、「文化的なもの」「自然」「人との繋がり」などに分類する。このおかげで、情報が整理しやすく、スムーズな話し合いが可能になる。こうして発見した魅力に適したキーワードを考え、外に発信している。

②地元開催のマラソン大会への参加

毎年香美町で行われる「みかた残酷マラソン全国大会」「村岡ダブルフルウルトラランニング」に、全校生がボランティアスタッフとして参加している。企画や運営にも携わり、魅力的な大会となるよう高校生独自の企画を提案し、実践もしている。例えば、「なまえ応援隊」「ふるさと観光地巡り」「コミュニティ広場の新設」などがその取組に当たる。

「なまえ応援隊」は、走っているランナーのゼッケンを見てパソコンから名前を検索し、ランナーの名前を呼んで応援する。これはランナーを勇気づけ、最後まで走り切ってもらおうという気持ちから始まった企画である。

「ふるさと観光地巡り」は、マラソン中ランナーの同伴者に高校生のガイドで観光地を案内する。おもに「うへ山の棚田」を案内するのだが、生徒たちは他地域の方々にも地元を知り、好きになって欲しいという気持ちを強く持っており、毎年趣向を変えての説明にクイズ形式などで工夫を凝らし行っている。ガイド役はエの「環境班（棚田）」の生徒が行い、事前練習や打ち合わせの段階では「人前で話すのは恥ずかしい」「僕たちの説明で理解してもらえるだろうか」と不安を見せるが、当日は自分たちでアドリブを入れ、突然の質問にもしっかりと答えていた。

また「コミュニティ広場」は、参加者から「ランナー同士、また高校生との交流の場が欲しい」という意見をいただき、ゴール会場に設けられたものである。生徒はこの場でランナーとの交流も兼ねて聞き取り調査も行っている。この結果をもとに生徒による会議を開き、ランナーの気持ちを共有しつつ、その視点から自分たちの活動を振り返り、更に魅力的なマラソン大会になるように企画していく。

生徒たちはこの2つの大会中に多くの経験をすることで成長する。その原点は「人との触れ合い」である。ランナーの中にはエイドで足を止め、生徒にエールと「いつもありがとう」の声を掛けてくださる方もいる。「民謡集団蘇武」が踊りでランナーを鼓舞するのだが、昨年度は本校で練習に参加し、本番でも一緒に踊ったランナーもいた。初参加した1年生の感想文にも「感謝の言葉をいただき、応援するつもりが逆に励まされた。この伝統を守っていききたい。」とあるように、この2つの大会に関係する方々との交流から多くのことを学び、彼らが成長していく様子が見て取れる。

③活動成果の発表

10月の土曜日に「村高フォーラム」と称して活動報告の機会を設け、地域の方々にも多数ご参加いただいている。プレゼンテーションとポスターセッションでの発表を行い、活動の振り返り、反省、提言を行う。ポスターセッションでは参加者から質問や意見、また賛辞が、生徒の自信や意欲に結びついている。

3 おわりに

今の村岡高校を作ったのは、退職された教職員を始め、多くの方々の愛校心からに他ならない。この流れを次のステージへと昇華させていくのが、私の使命だと考えている。

“実践の中に わが師あり”

“地域の中に わが師あり”



「自分らしく働く」を目指したデュアルシステム ～障害のある生徒の就労実現を目指して～

県立西神戸高等特別支援学校 主幹教諭 もりかわ あきら
森川 晃

【プロフィール】 県立播磨特別支援学校の就業技術科、県立姫路しらさぎ特別支援学校、県立西神戸高等特別支援学校の立ち上げに進路指導の立場で関与。デュアルシステムを取り入れた進路指導を展開。平成29年度兵庫県優秀教員に選ばれた。

1 はじめに

日本は、2007年に「障害者権利条約」に署名、2014年に批准した。その間、国内では、障害者基本法の改正、障害者総合支援法の成立、障害者差別解消法の成立および障害者雇用促進法の改正など、様々な法制度整備が行われた。障害のある生徒が、積極的に参加・貢献していくことができる「共生社会」への準備が整ってきた。一方、特別支援教育には、生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、生徒の能力や可能性を最大限に伸ばすことで、自立し社会参加させる支援が求められている。このような背景のなか、知的障害のある生徒の就労実現を目指して行ってきた、デュアルシステムの取組を紹介したい。

2 各校のデュアルシステム

特別支援学校においては、兵庫県特別支援教育推進第二次計画に基づき、キャリア教育・就労支援の充実が求められている。私は、そのなかで県立播磨特別支援学校の就業技術科（平成21年度開設）、県立姫路しらさぎ特別支援学校（平成26年度開校）、県立西神戸高等特別支援学校（平成29年度開校）の立ち上げに関わり、教育課程の作成及び進路指導体制としてデュアルシステム※の構築を行ってきた。それぞれの学校で当初構築したデュアルシステムを紹介する。



① 県立播磨特別支援学校

「播磨デュアルシステム」

職業体験実習を1年生で2回、2年生で3回行い、3年生の就職活動までに、様々な職業の中から自分らしさを発揮できる職業を見つけしていく。個別の進路相談会で実習を振り返りながら、今後の進路指導の方向性を進路指導部・担任と生徒・保護者がチームとなり支援していくシステムである。

② 県立姫路しらさぎ特別支援学校

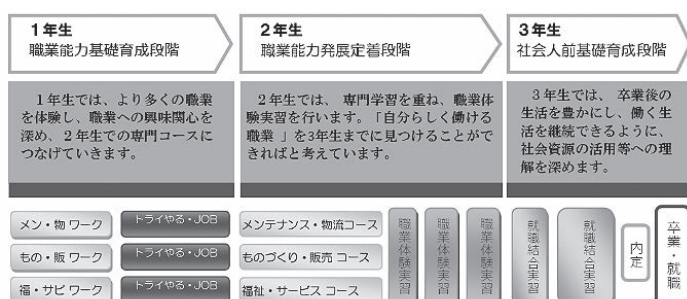
「ふあ～すと・トライ」から始まるシステム

企業就職を希望する生徒に対して、1年生から就労移行支援事業所での体験実習（ふあ～すと・トライ）を試み、結果によって2年生の終わりまでに企業体験実習を2回、現場体験実習を2回実施する。進路の個別相談会を実習の終了ごとに実施し、卒業後、すぐの企業就職を目指すか、または、卒業後に就労移行支援事業所や職業訓練校を通すかを適時検討していく。自分らしく企業就職を目指す方法を探るシステムである。

③ 県立西神戸高等特別支援学校

「西神戸版デュアルシステム」

校内で各種の職業技術を学ぶワーク学習を実施し、その後に企業で実体験（トライやる・JOB）を行う流れを1年生で3回繰り返し実施する。その結果を2年生でのコース学習につなげて行く。2年生では、さらに各コースで職業技術に対する学びを深めながら、3回の職業体験実習（2週間）を行い、自分らしく働く職業を、生徒自身の意思で、自己選択・自己決定できるよう支援するシステムである。



▲ 西神戸版デュアルシステム

3 デュアルシステムのめざすもの

デュアルシステムにおける企業での体験実習は、実践的な「ほんもの」の体験を通し、職業観・勤労観を形成することが大きな目標となる。その過程で「自分らしく働く」「自分らしく生きる」を、生徒自身の意思で、自己選択・自己決定できるよう支援することが、進路指導の核となることを意識していかなければならない。これが、昨今、課題となっている就職後の離職の減少につながるということを留意すべきであると考えます。

また、デュアルシステムは、企業就職を実現するだけのシステムではなく、卒業後、就労移行支援事業所や就労継続支援事業所、職業訓練校等の選択も含め、「働くことを自分らしく目指す」ことを見出すシステムでもある。学校で学んだ職業教育の成果と高めた就労に対する意欲を卒業後につなげる目的も併せ持っている。

4 体験実習を通しての質的成長

体験実習を終えるごとに、生徒の自信にあふれた声が聞こえ、成長を感じる場面に出会える。普段の教室で指導されている内容が、現場で認められたときに生じる自己有用感のなせるものであろう。また体験実習で得た自信が、実習後の授業で学ぼうとする意欲につながっていくのである。この意欲の循環と上昇（質的成長）が「働く意欲の育成」に他ならないということを感じている。

自分が、努力もしていないことに対して「よく頑張りました」と褒められても、うれしくもなく、励みにもならないものである。普段の職業教育が、生徒に達成感や充実感を与えることができ、かつ主体的に動ける工夫がされたものでなければ、自己有用感を感じるまでには至らないのである。



西神戸高等特別支援学校では、1年生でトライやる・JOBに取り組んでいる。校内で、それぞれの職業に必要な30時間の専門学習（ワーク）に取り組んだ後、3日間の仕事体験を企業に依頼している。6種の職業について学び、3種の職業を選択し、抽象的な学びをより具体的な職業観に変えていく。校内での学習と企業での体験内容の整合性を図り、生徒の自己有用感を高めている。

1年生 職業能力基礎育成段階

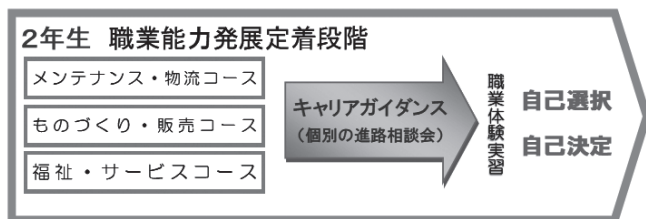
全員が農園芸や受託作業を実施し、職業基礎を育成
メンテナンス・物流ワーク 各ワーク30時間の専門的
ものづくり・販売ワーク 授業を実施した後で、3日
福祉・サービスワーク 間の職業体験を実施
2年生の3つのコース選択につながるワークを履修し、
トライやる・JOBの体験で確かなものとする

また、2年生では、1年生での取組から職業について学ぶコースを選択し、さらに職業についての専門的な学習を重ねる。その学びをもとに企業での職業体験実習を実施し、さ

授業実践

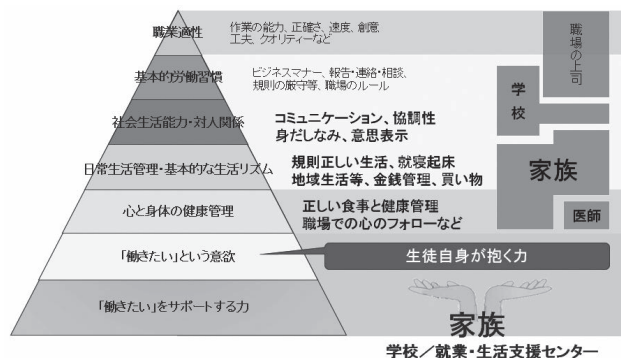
らに自己有用感を高め、意欲の循環と上昇（質的成長）を図っていく。

普段の授業が達成感や充実感が得られる内容となるように、社会的自立と職業的自立に向けた授業と体験実習から得た課題が三位一体となった教育課程を編成することが今後の課題となる。



5 働くことを目指すために必要なもの

意欲の循環と上昇（質的成長）のためには、デュアルシステムでの体験を振り返り言語化し、活動の意味づけを大切にする取組をキャリア発達の視点で行うことが重要となる。県立西神戸高等特別支援学校では、キャリア発達段階表を「はたらく準備性ピラミッド」を基準に作成している。働く上で、①職業適性(作業能力)や労働習慣は、必要なものではあるが、その重要度は高くない。就職後、企業内において、作業環境・内容への合理的配慮で改善が見込まれる部分でもある。大切なのは、その仕事力を支える土台となる部分である。②社会生活・日常生活の能力、対人関係や生活リズムなどの確立がより重要なベースになる。そして何より必要となるのは、③「働きたい」という意欲であり、それを支える④サポートする力である。サポートする力は、家庭であ



▲ はたらく準備性ピラミッド

り学校であり、また福祉関係機関である。企業で働きたいという願いが叶うかどうかは、①～④の総合的な働きかけで決まる。就労を支援するには、発達段階表に表した領域へのそれぞれのアプローチが教育活動全般にわたり計画的に求められることが必要になる。

6 ガイダンス機能の充実

主体的な進路選択を支援するためには、生徒の能力・適性、興味・関心と職種希望等に基づいた「個に応じたガイダンス機能」を充実させることが重要である。県立西神戸高等特別支援学校では、生徒・保護者及び担任が、進路担当者に今後の進路指導の方向性について相談を行う形式で、各生徒に進路ガイダンスを実施している。進路ガイダンスでは、就労先の情報提供を積極的に行い、また生徒の体験実習先の希望に耳を傾ける。前回の実習の振り返りを行いながら次の実習先の選定を生徒自身が行うことで、自分らしさを発揮できる職業へのマッチングを図っていく。進路指導は、生徒に対して教師が一方的に与えるだけでなく、生徒が主体的に考えながら自らが積極的に取り組んでいくものであると考える。そのためには、ガイダンスを軸に進路担当者と担任の計画的、組織的なチーム支援が大切である。

7 共生社会に向けて

デュアルシステムは、企業への障害者雇用の理解啓発の一面も併せ持っている。生徒の居住する地域周辺で実習先を広く新規開拓し、実習を通し、生徒がそこでのがんばりを見せることで、企業の障害者雇用への理解を深めていく効果も高い。デュアルシステムの取組が、共生社会への礎を築く活動となることを信じ、これからも一層の努力を惜しまず取り組んでいきたい。

※デュアルシステムとは、学校における職業教育と企業における実習とを並行的に実施する職業訓練システム。